

音もなく降りしきる雪は、やがて、あたり一面を、真っ白に染めていきます。見慣れた風景が、全く異なった風情^{ふぜい}を見せます。私たちは、その景色に、しばし見とれてしまうでしょう。この純白の世界を、いつまでも見続けたい、と思ったりするのではないのでしょうか。

しかし、やがて、雲が晴れて、太陽の光が差し込み、あるいはまた春が巡り来て、気温が上がると、雪は溶けて、水となります。

雪は、ある一定の条件が揃った時にだけ、その姿を見せるのです。

雪は、それ自身の力だけでは存在することはできず、また永遠に雪という形をとどめるわけではないのです。

雪だけではありません。

すべての存在は、常に変わり続け、また互いにつながり合い、それぞれが独立して存在するものではありません。

さまざまな原因と結果が、複雑に絡み合い、それぞれが微妙にはたらき合ってはじめて、ある一つのものが、存在できるのです。

雪をいつまでも、見ていたいと思っても、それはかなわないことなのです。

しかし、いつかは消えゆく風景だからこそ、そこに美しさを感じるのかもしれない。

私たちも、そうなのです。

私たちの「いのち」は、さまざまな原因と結果が、複雑に絡み合い、いろいろな存在が微妙にはたらき合って、はじめて成り立っているのです。

そして、いつまでも同じ姿ではあり得ないのです。私たちも雪と同じように、常に変わり続ける存在なのです。

しかし、それは悲しいことではなく、いつかは終わる「いのち」だからこそ、今この時を、美しく尊いものと感じることが出来るのです。

音もなく降りしきる雪が、森や川、家々をひと色に染めていきます。いつかは消えてしまう雪景色を、限りある「いのち」を、生きる私たちが見ているのです。